

上田 泰先生を偲んで

東京慈恵会医科大学名誉教授

酒井 紀

恩師、上田 泰先生(東京慈恵会医科大学名誉教授、第3代日本腎臓学会理事長)が平成20年4月8日、94歳の天寿を全うされ静かに永久の眠りに就かれました。先生は、大島研三先生、吉利和先生、浅野誠一先生とともに、日本腎臓学会の創立に尽力され、学会の発展に多大な貢献をなさいました。

先生は、大正2年9月長野県松本市で生まれ、昭和14年、東京慈恵会医科大学をご卒業、同大学の加藤義夫内科学教室に入局されました。戦時中、陸軍に召集され軍医として千葉県習志野陸軍病院に勤務されました。そこで、後にカナマイシンの開発者となる梅澤浜雄先生との出会いがあり、戦後、先生が化学療法の研究に興味をもたれるきっかけとなりました。終戦後、逸早く母校に復帰された先生は、加藤教授から与えられた腎臓の研究を再開、腎臓の血流に注目し、当時、大島研三先生、金子好宏先生らによって紹介された腎クリアランス法による腎機能の研究を始められました。先生は化学療法にも着目し、ペニシリン・クリアランスによる腎機能検査など化学療法との関わりをもち、昭和28年には日本化学療法学会の設立に加わっておられます。昭和31年からは、先生の研究グループは、新潟大学内科の木下康民先生からわが国に初めて導入された腎生検法を学び、機能と形態の研究を目指されました。

昭和33年7月、先生は43歳の若さで新設された東京慈恵会医科大学第4内科学教室の主任教授に就任され、腎臓の機能と形態を中心とした研究を強化するとともに、感染症と化学療法に関する研究など、内科学教室としての基盤の拡大に尽力されました。また先生は、当時欧米で注目されていた第3の腎疾患とも言うべき腎盂腎炎に着目され、臓器「腎臓」と感染症を結びつける疾患として、内科領域における腎盂腎炎の病態解明を積極的に進められました。先生は、昭和39年内科学教室開設6年目で、第61回日本内科学会総会の宿題報告として「腎盂腎炎」についての研究成果を報告する名誉に恵まれ、高い評価を受けられました。先生は、腎の感染症としての腎盂腎炎の定義、尿中細菌定量培養法による細菌尿の臨床診断基準などを明確にされ、細菌性腎盂腎炎と感染が明白でない腎盂腎炎様疾患とに分けることを提案されました。先生のこの考え方は、その後の尿細管間質性腎炎研究の方向性を示したものと言えます。

先生は、腹膜透析をわが国の臨床に導入されたパイオニアの一人でもあります。昭和38年ブラハでの第2回国際腎臓学会に出席され、「尿毒症患者の腹膜灌流」のシンポジウムを聞かれたのがその動機となりました。先生は透析液の試作を当時の清水製薬に依頼し完成させるなど、わが国の腎不全医療に大きな足跡を残されました。また、先生の数々の功績のなかで特筆すべき業績として、ネフローゼ症候群の治療に関する研究があげられます。当時、臨床領域に導入されて間もない本症候群のステロイド治療に関して、研究者間での見解の違いが大きく、かなりの混乱がみられましたが、先生が中心となって昭和43年から始められた成人ネフローゼ症候群治療研究会は、5年間のステロイド療法による治験を開始するために、診断基準、ステロイド薬の使用法、治療効果判定基準などを明確にし、治療成績をまとめられました。当時として画期的なこの治験は、その後のわが国におけるネフローゼ症候群の治療の基本となり今日に至っています。昭和48年度から開始された厚生省特定疾患ネフローゼ症候群調査研究班の発足につながり、さらに慢性腎炎、腎糸球体障害、進行性腎障害調査研究として今日まで継続されています。先生はこ

の腎に関する厚生省特定疾患調査研究の最初の研究班長をお務めになりました。

日本腎臓学会は昭和 46 年から総会のほかに東部々会と西部々会を発足させましたが、先生はその第 1 回の部会長を務められ、症例など臨床重視の研究を中心とする部会のあり方を示されました。昭和 48 年には第 16 回総会を主催され日本腎臓学会の発展に貢献されました。先生は昭和 57 年から 3 年間理事長も務められました。昭和 50 年から第 20 回日本医学会総会準備委員長に就任された先生は、会頭樋口一成先生が急逝されたなかで大変なご苦勞をされ、盛大に医学会総会(昭和 54 年 4 月)を成功に導かれ、重責を果たされました。先生は、同時に第 76 回日本内科学会総会会頭も務められましたが、「疾患の変貌とその対策」と題した先生の会頭講演は、当時の内科学の実状を知るうえで極めて示唆に富み高い評価を受けられました。

先生は昭和 54 年 3 月定年で東京慈恵会医科大学を退任、名誉教授としてその後も活動を続けられました。先生は、当時、医学の進歩とともにわが国における社会機構や環境の急速な変化に伴う疾病の変貌に注目され、正しく対応していくことの重要性を指摘されておられました。米国で当初奇病として注目された AIDS について、先生は感染症の立場から早くから関心を示し、第 21 回日本医学会総会(昭和 58 年)において「感染症の変貌とその化学療法」と題して特別講演を行い、わが国の公式の医学会で初めて AIDS を取り上げ、その脅威を示唆されました。先生は病院感染症をはじめ環境由来の感染症を重視され、昭和 60 年に環境感染学会を設立するとともに初代理事長に就任され、変貌する感染症の拡大に警告を鳴らされました。平成 6 年、第 37 回日本腎臓学会総会において、先生は 80 歳の高齢をおして、小磯謙吉先生の要請に応えられて「日本腎臓学会の 40 年を顧みて一腎疾患変化の推移を辿って一」と題して特別講演を行い、会員に大きな感銘を与えられました。

先生は、卓越した洞察力と指導力によって多くの弟子を育てられましたが、医学者として大変厳しい先生でした。先生は“humanity”を座右の銘とし、生涯を腎臓病学や感染症学の発展に貢献され、先生の信念を貫かれました。長年にわたってご指導とご教授をいただきましたことを改めて御礼申し上げます。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。安らかにお眠り下さい。